

図書館友の会 公開講演会

食べるコラーゲンは効果があるか？

ーコラーゲンペプチドの生理機能ー

講師：杉原 富人氏（図書館友の会副会長，学術博士）

日時 6月17日(金) 午後2時30分～4時30分

場所 岸和田市立図書館（本館）3階自習室

定員 60名（申込み先着順） 【参加費無料】

※ 5月17日(火)正午より図書館(本館)で受け付けます。

直接または電話（072-422-2142）でお申し込みください。



楊貴妃像(林文森作、木彫)

世界三大美女の1人として有名な楊貴妃（ようきひ）は、美容食材を多く食していたと記されています。その美容食材の一つに「阿膠（アキョウ）」と呼ばれるロバの皮を煮詰めてできた生薬も食していました。この「阿膠」が食べるコラーゲンの原型であり、女性特有の生理痛の緩和や、出産後の滋養や抜け毛の改善、骨粗しょう症予防などの治療効果、肌荒れ・乾燥の防止などの美容効果があるとされ、現在でも利用されています。

これらの効果は科学的に裏付けられるのでしょうか？ 本講演では、食品補助剤としてのコラーゲンペプチドに関し、ヒト臨床試験による効果（エビデンス）とその作用メカニズム解明の現状を話題提供します。そのことによって、「食べるコラーゲン」の生理機能がユニークであることを明らかにします。

「図書館友の会」総会

午後2時～2時20分

6月17日当日、講演会の前に「図書館友の会」の総会を開催します。会員の皆さんはご出席ください。

- ① 2021年度 事業報告及び決算報告
- ② 2022年度 事業計画(案)及び予算(案)
- ③ 「友の会」役員人事 等

「和泉国」を越えた役割を果たした中世の久米田寺

79名の参加者が、最後まで熱心に聴き入りました

今年は岸和田市の市制施行100周年です。これを記念した第一弾の公開講演会として企画し、3月5日に八木市民センターで開催しました。

「中世久米田寺の役割—『久米田寺文書』を中心に」と題して、大阪歴史博物館の大澤研一館長が講演。テレビ岸和田様の協力による「モニター放送」での第2会場も含めて79人の参加者が質疑応答も含め、最後まで熱心に大澤先生の講演を聴き入りました。

講演は、2020年に南北朝期の北朝文書など17巻・116通が国指定重要文化財に追加され、『久米田寺文書』に包含された経緯から始めて、[Ⅱ. 久米田寺の成立]，[Ⅲ. 平信兼と和泉国・久米田寺]，[Ⅳ. 久米田寺の画期と兼学寺院化]，[Ⅴ. 祈願所としての久米田寺]と、『久米田寺文書』からの出典を紹介されながら詳しく説明されました。

現在放送中のNHK大河ドラマ『鎌倉殿の13人』に登場する伊豆国目代山木兼隆が、平信兼（和泉国司）の弟であったことなど、今回の大河ドラマの場面（第4回【矢のゆくえ】）を思い起こしました。また、鎌倉時代には安東蓮聖（あんどうれんしょう）による寺の復興以降、名だたる僧侶たちによる華嚴・戒律・真言の兼学道場としての活動、中国（宋）からも4名の僧侶が久米田寺で学び、寺域内に茶園まで所有していたことなど、中世久米田寺が和泉国を超えた役割を果たしていたことを再認識しました。

地元八木地区に住む私は、これら『久米田文書』を読み下す中で久米田寺を介して郷土の歴史を掘り起こす必要を感じた1日でした。

最後に、大阪府教育委員会から公表されている『有形文化財久米田寺文書 [指定調書]』（2019年3月22日）で記されている【評価】項目を以下に引用します。

○ 評価

本文書は、中世の政治史、仏教史、寺院史、庄園制などにかかわる多様な内容を含んでおり、久米田寺を中心として、和泉国の中世地域史を多様な視点から考えることができる歴史学上非常に重要な寺家文書といえる。また、原資料による研究があまり進んでいない南朝発給文書を多く伝えており、古文書学上においても貴重である。加えて、久米田寺で修学をした僧侶たちによる教学の広がりなど、他寺院に伝存する史料を踏まえることで、一寺院の歴史にとどまらない中世仏教史を考察しうる貴重な史料を久米田寺文書は有している。

以上より久米田寺文書は、歴史学上、古文書学上きわめて学術的価値が高く、本府指定有形文化財にふさわしい。

（杉原 富人）

私は元長距離ランナーでしたが、高齢の今（80才）となつてはその面影もなく歩くのがやっとです。現役時代のトレーニングで久米田池 1~3 周（2.8km/周×1~3 周/回）のコースはお気に入りでした。四季に移り変わる景色、特に池の水の微妙な表情の変化、春の桜には何か妖しげな気持ちになってランニングを楽しめました。歳をとって今はサークル活動に入って、再び久米田池・久米田寺とご対面中です。

今回の大澤先生の興味深いお話からの印象として、私の心に残った課題と興味をここでは 2 点記します。

① 怪僧・安東蓮聖（あんどう・れんしょう、1239-1329 年）の存在。

久米田寺中興の祖であると同時に「金融王」でもあったとか。必要な原資はなんと大阪湾・兵庫明石辺りの船の管理権・漁業権・通行税のめしとりであったとか。一途な求法僧ならぬ聖俗併せ持つ蓮聖は、矛盾に満ちた魅力ある大きな人物に見えます。その利権の継承は、きっと泉佐野出身の鍛野与三郎（1590 年）・御一統に受け継がれていったかもしれません（これは殆ど私の妄想）。欲深くこの世でもあの世でも双方で安心立命を懸命に恋願ったに違いない蓮聖については、機会があればもっと掘り下げてみたいです。

② 祈禱所としての久米田寺。

寺の主（守・首）教がなんと華嚴経であることは、私にとっては大変な底力と魅力を感じます。まずは宣明でもって国家の安寧を願い祈ったらしい。祈りという行為については当時の僧達は大衆の煩惱（生・老・疫・死）に対して直にかかわる：久米田寺も、たとえば網野善彦氏のいうアジール（聖域）としてもかかわっていたのではないかが、今の私には気になるところ。平安と健康に対する祈りの効用が絶大であるということは、現代科学でも証明されているらしいです。ここ泉州でも長いスパンで見ると、当時のこの久米田寺での祈禱・宣明が天高く響き渡り、その効用は今なお残存・残響（？）しているかもしれませんね。

私は何だか久米田寺・久米田池にオールドな恋をしているかな？ （ Z 記 ）

歴史カフェ

鎌倉時代の久米田寺

カタリスト 杉原富人 氏

「図書館友の会」副会長

鎌倉時代の久米田寺「再興の祖」とされる北条時頼の御内人・安藤蓮聖（あんどうれんしょう）の役割に焦点を当て、①なぜ、久米田寺を再興したのか、②なぜ、西大寺僧・叡尊（えいそん）を落慶法要の導師としたのか、③いかにして、何によって、学山久米田寺になったのか、を話題提供して話し合います。

日時 4月24日（日）午前10時～正午

場所 岸和田市立八木市民センター 2階講座室1

主催 図書館友の会・再発見教室 申し込みは不要です。

文章教室が、公開講座を開催しました

ちょっとした身の回りのことを「なんでも書こう」と集まっている文章教室の活動について、普段通りありのままお見せし、講師の講評や合評の場にゲストの皆さんに参加していただきました。寒の戻りで寒い中、またコロナの「まん延防止等重点措置」が解除される2日前という微妙な時期の3月19日（土）午後1時～4時に開催しました。

当日は、手指の消毒、検温、窓を開ける等の換気はもちろんのこと、対策を徹底しながら、講師の倉橋健一先生、ゲスト男性2名、教室生11人の合計14人で臨みました。

最初は、皆さん緊張気味でした。でも、時間が経つにつれほぐれ、それぞれの作品の講評、合評、ディスカッションに熱が入り、笑いあり、涙あり、素敵な時間となりました。

特に今回は、作品を持参されたゲストが出席されたので、一段と盛り上がりました。倉橋先生のご指導も普段以上に情熱を感じました。

参加いただいた皆様には感謝しかありません。

アンケートでは、公開講座開催の情報を得たのはチラシや「図書館だより」とありました。昨年デジタル庁が設置されるような昨今ですが、手にとって触れる活字の紙面が、あるいは言葉が重要であると実感しました。今回何事もなく無事に「公開講座文章教室」を終えることができました。お世話になった皆様に深く感謝いたします。

地名の秘密

⑳ 木賊山町（とくさやまちょう）

謡曲「木賊」に由来する町名

京都でも難読地名の一つ。京都市下京区仏光寺通西洞院西入ルにある町名。木賊とはトクサ科の常緑多年草。茎が硬くざらついているので、古くから木材などの表面を磨くのに用いられる。砥（と）ぐ草の意で「とくさ」と名付けられた。「砥草」とも書く。「木賊（とくさ）」の表記は漢名からで、木をそこなう、すり減らすという意味。

トクサは日本では北海道から本州中部にかけて山間の湿地帯に自生する。福島県南会津郡に、植物のトクサが群生していたのでつけられた地名「木賊」がある。

京都市内にはトクサは自生していないと思われる。ところが京都市内に木賊山町（とくさやまちょう）という町名がある。

町名の由来は謡曲『木賊』に由来する。天文10年（1541）頃、世阿弥の作と伝わる謡曲で、都の僧が今一度父に面会したいと言う少年を連れ、父のいる故郷信濃の国へ下り園原山に着いた。折しも、老人と里人が「トクサ」を刈っているのに会い、老人は僧を我が家に案内する。彼は一子をかどわかされ、このような旅舎（たびしや）を営み、行方を捜していると身の上を語る。ここで、この少年が探し求めいている一子「松若」だと分り再会を喜びあう。

この様子を謡曲「木賊」から、山鉾のご神体（人形）として取り入れ町名も木賊山町（とくさやまちょう）とした。人形は腰に蓑を、左手に木賊、右手に鎌を持っている。木賊山町と町名をつけたのも、納得がいく。「砥草」と書けば分かり安いのだが、あえて「木賊」と書いて町名にしたのも京都らしいなあと思った。

【文責】 文章教室 浦田榮二